
みなさん、ウサギが攻めて来ました！

未来 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みなさん、ウサギが攻めて来ました！

【Nコード】

N6335Y

【作者名】

未来 真

【あらすじ】

極平凡に生きてきた少年、草山^{クサヤマ} 兎太^{トタ}。

が、ある日突然怪奇現象に巻きこめれた。それは……

「そ、空から女の子!?!」

空から降ってきた少女ウサギ。

そんなウサギと兎太との笑える泣ける(?)

ちよつとありえないファンタジー!!!

第一章

さて、君は小さいころ……月に は な に が いると教わりましたか？
うんうん。《うさぎ》だよ。

それってさ、白かったり…黒かったりと意外とカラフルで、耳が
長くて、一言で言うと「かわいい」に分類される…アレだよ
？ お餅をついてるって言う、あの《うさちゃん》だよ？

今、我が星ヶ丘高校に向かおうとしている僕は、いつもの通りに
桜が舞い散るこの坂を、歩いてたんだ。今日は天気が良くて良くて
……サッカー日和だなあ、なんて言いながら、ぼけえ っと
空を眺めていたんだ。

すると突然、女の子が降ってきて…

「はい、ストップ」

今日の出来事を思い出しながら説明している僕に、翠は急に口を
出してきた。

「なんだよ、翠。せっかく僕が話してるのに」

「あ…ああ、ゴメン。」

翠はそういいながら頭をガシガシとかいた。

この頭をかくのは翠の小学校のころからの癖。謝っているときに
いっつもガシガシしている。

「じゃあもう一度、サッカー日和のところから話してくれ。」
しかたないなあと言いながら説明を再開する。

………サッカー日和だなあ、なんて言いながら、ぼけえ
っと空を眺めていたんだ。

すると突然、女の子が降ってきて…

「はい、ストーブ」

「今度はなんだよ!？」

と、僕の声が昼休みの屋上に響き渡る。

すると、屋上でランチタイムを取っていた生徒たちが一斉に僕を見る。

わお! お恥ずかしい(キヤツ)

「あんな、^{トク}兔太。お前に妄想癖があるのは9年も前から重々承知だ」

「いや、僕に妄想癖は……」

「でもな、妄想君。俺を巻き込むな」

「僕、妄想君じゃな……」

「いいか、妄想君が妄想していると一緒にいる俺まで妄想しているかのように思われてしまう」

「あの、翠…だから僕は……」

「妄想君、離れてくれ」

妄想妄想妄想と……

「僕は妄想君じゃな……いい!!!!!!」

翠め、妄想をバカにしゃがって! 全国の妄想している少年少女たちに謝れってんだコンチクショー!!

ってあれ? これじゃ僕が全国の妄想君たちをかばっているようではないか!? いや、違うぞ。僕は妄想なんて……

「してんじゃねーか」

「してないよ……って、あれ? 翠僕の心の声が聞こえるの?」

だとしたらすごい! 翠、区长賞ももらえるかも。

「実は俺。すごいパワーを持っているんだ」

「ねえ、どんなパワーなの!？」

「知りたいか……?」

「う、うん」

おお…。なんか僕、翠に凄まじいオーラを感じるよ。

ゴクンツ……。屋上に息を呑む音だけが聞こえる。

「バカの心を読めるパワーだ。」

「なーんだ。期待して損した、って……」

「僕はバカじゃなーーーーーい!!!!!!」

嗚呼、まただ。

僕は本日二回目、屋上にたくさんさんの白い目にならまれているのであった。

* * *

時は数時間たち、今日の授業を終えた僕らは、学校から近いハンバーガーショップに場所を移し例の話の続きをしていた。

「で、その空から降ってきた女の子はなんだったんだ？」

翠はさつき買ったばかりのコーラを片手に頬杖をついている。

「あれ、聞いてくれるの？」

「まあ、暇つぶしにな」

暇つぶしってところになんとか引つかかるけど……、聞いてくれるだけよしとしよう。

こんな時、結局は僕の話聞いてくれる翠。いい奴だな

「そ、その女の子なんだけど……」

そう。僕はそのときすっごくびっくりしたんだけど。なんでだろう？ それ以上に僕はその少女に興味を持ったんだ。

でも、相手は空から降ってきた得体の知れないヒト。僕は恐る恐る声をかけてみた。

『君は誰？』

すると少女は答えたんだ。

『ウサギだ。』

「はい、修了ー。」

「え、ちょっと!? まだ話の途中なんだけど」

「兎太よ、君も今日からスーパー妄想人だ」

「えっ!? なんて《スーパー〇イヤ人》みたいに言うんだよ!?」

う、全然撤回だ。翠はいい奴なんかじゃない……!

「だってさ、なんで少女が《ウサギ》になっただよ。おかしいだろ」

「いや、僕もそう思ったよ!」

「 だって、見た感じ綺麗な女の子だったし……」

そう、彼女は綺麗だった。そして、耳も短く…: により、モコモ

コじゃなかった……!

「で、その子はなんだったんだ?」

「う、うん……」

『ウサギだ。』

は、はい?

少女は僕に薄紅色の瞳を向けてそう言った。

『う……うさぎ?』

『そう、ウサギだ。』

う、うさぎってモコモコの耳ピンな、あのうさぎだよね?

もう、今までにないくらい脳みそをフル回転させた僕は、試しに、こんな質問をぶつけてみた。

『どこの動物園出身ですか?』

「うん。違うな」

翠が突然呟く。

「ん? なにが?」

「いや、お前の質問だろっ!?」

「ほ、ほえ!？」

そーかな? 脱走した動物は動物園に返しなさいって、昔ばあちやんに教わったんだけどな。

「いいか、相手は女の子だよな？」

「うん」

「でも『ウサギ』って言ったんだよな？」

「うん」

「明らか、おかしいよな？」

「うん」

「せめて『何者ですか？』だろ」

「いきなり聞くの!?!」

「いや……。お前の『どこの動物園出身ですか？』のほづが危ないと思うが……」

そういつて、またコーラを一口飲む。

「ま、まあいい。それで？」

「ああ、うん」

それで ああ、そうそう。彼女は、こつ答えたんだ。

『私は月から来た。』

『つ、月？』

僕はもうショートしてしまいそんな脳みそをさらにフル回転させた。

『月って、あの夜に見える黄色のヤツ？』

『ああ。』

僕は思った。どうやってきたんだろうって……。

「違うだろっつ!!?!?!?」

鼓膜が破れそうなほどの翠の声につい、耳をふさいだ。

そして、そう。

三回目の白い眼差し……。

「なあ、兎太。兎太よ。」

「な、なあに？」

まだ耳がキーンとする。

「お前はバカだ!！」

「断言!？」

いやいや、そこじゃないぞ僕。

「翠、何で『バカ』なんだよ」

「お前なあ……。《ウサギ》は月から来たんだよな？」

「うん」

なんかさっきもあつたな、この質問攻め。

「いいか？ どう来たかの前に、なぜ疑わない!？」

お。なるほど。

「……ほんとに、兎太は抜けてるな……。まあいい。それで、その後ほ？」

「んーなんかね『任務を結構しよう』って言って、消えちゃった。」

「ふう、そうか……」

ズズズ……。コーラを飲み終えたらしい翠は、話す前と比べて、やつれていた。

「あー。なんかすつごく気力を奪われたな……。さて、帰るか」

時刻6時30分。もうそろそろ帰ってもいい時間だ。

「そうだね」

僕は食べかすなどを片付けて、外に出た。

ふう、なんだか疲れたな。

「俺もだ」

僕の心を読み取った翠は、とてつもなく、顔色が酷かった。

第一章（後書き）

こんにちは！

未来 真です。

楽しんで小説書いています。

感想等をバンバンジャンジャンください！宜しくお願いします。

第一章 二

「あら、おはよう兎太君。ずいぶん早いわね」

「あ、うわさ好きの山田さん。おはようございます！」

「コレでもか！ と言うほどの笑顔で山田さんに挨拶をした。

ああ、やっぱり朝の挨拶は気持ちがいい。

いつもより早く目が覚めてしまった僕は、家にいてもつまらないので早めに家を出ていた。

家を出てから十数分。僕は昨日ウサギと出会ったこの坂を歩いて
いる。

「今日はいないのかな……」

空を見上げながらボソツと呟く。

「たしか……」

昨日ウサギが落ちて来た場所はここだった。

僕は、その場所に立ってみる。

そして、ウサギのことについて考える。

月から来たと言った少女のことを考える。

月……

ウサギ……

お、おもち……？

「アー！！ ダメだ！！」

もうこの際、僕の隣を通りかかった犬と飼い主さんが僕の声にビクツとしたのは、おいておこう。

「……って、もうこんな時間！？」

ぶつぶつ言っている間に結構な時間が過ぎてしまったらしい。

「急げっ！ おう！」
僕は自問自答しながら、学校に続くこの坂を上っていった。
今日もたくさんの桜の花が僕を見降ろしていた。

* * *

学校に着き、ダッシュで上履きに履き替え、さらにダッシュで教室まで行く。
すると教室にはもうほとんどの人が席についていて、担任の先生が来ていた。

って、やばい！ 遅刻じゃん！
僕の華麗な走りも虚しく、学校に着いたのはチャイムがなったあとだったようだ。

教室の後ろのドアを開けて中の様子をうかがう。
運良く連絡事項がたくさんあるらしく、先生はそれを言うのに夢中だった。

ユツクーリ、ユツクーリ。教室の中に入る。もちろん、細心の注意をはらい、ホックセンシン匍匐前進である。

おっ。

すると、席についている翠と目があつた。

（声ださないでね）

アイコンタクトで伝えると、翠はOK、と指でサインしてきた。さすがは翠。もうすべてを理解しているようだった。

少しづつ、少しづつ、自席との距離を縮めていく。

よし、あと2メートル……

「センセイ。草山君がここで匍匐前進してまーす。」
と、翠の声。

ん……………
ここは…どこだ？

目を開けると目の前には真つ暗な世界が広がっていた。…という
か360度どこを見渡しても真つ黒で、その黒がどこまで続いている
かまったくわからないほどだった。
体もすごく軽い。まるで重力がないみたいだった。

すると突然声が聞こえてくる。でもその声は耳から聞こえるもの
ではなく、なんと言うか……頭の中に直接語りかけられているよう
なそんな感じだった。

《地球人よ。選ばれし地球の勇者よ…》
とても低く、太く、ドスンとした声にとても頭がガンガンする……
(ゆ、うしゃ…?)

その声の言葉を思わず口にする…が、音にならず、声が出ない。
《ああ、そうだ。勇者だ》
まったく理解が出来ない。

(あの、勇者って誰のことですか?)
《お前だ。バカな地球人》
ば、バカって……。 まあ、今回はおいておこう。

(あの…)
《なんだ、地球人》
ああ、頭が痛い。

(人違いです……)
僕の全力の否定だった。

《……………っぴ》

……ぷ？ え、この声の人今笑って…

《あーあ、やめやめ！この地球人おかしすぎ！》

あのドスグロイ声が急にかわいらしい男の子の声になった。

正直、ついていけないっ！

(あの…あなたは？)

瞬間。目の前が急に光った。まるで音のない爆発。そして……

(うさ……いや、にんぎょ？)

僕の視界に映るのは、なんとも奇妙な生物……と言っているのか？説明が、難しい……。まあ、簡単に言うと50センチくらいの人魚の『人』の部分がうさぎ……というもの。しかも、そのうさぎの部分の体が、横縞なのである。黒と白の。

『魚』の部分は青色で、あの魚っぽさはなく、どちらかというところのような尾びれをしていた。

そして何より体全体が、温かく光っていた。

《僕の名前はプルーサ。半獣半魚の、まあ平たく言うとモンスター？》

この無重力の闇の中で、プルーサは気持ちよさそうに泳いでいる。

(モンスター？)

モンスター……、怪物！？

(く、食われる……！)

僕はとっさに頭を抱えて丸く縮こまった。

ま、まだ死にたくない！

《ぷぷぷ……やっぱ君、面白いね！》

プルーサは腹を押さえて笑っている。

ああ、愛嬌あるなあ。

《あ、君！今僕をかわいって思ったでしょ！？この、無礼者！》

わわっ、急に怒られてしまった……というか、プルーサも翠みたいに心が読めるようだった。

僕はそんな衝動に襲われていた。

血が騒ぐ

しかし、それはプルーサの話を聞いてわかった。

あの血が騒ぐような興奮……………

それは決して偶然じゃなかったんだ

第一章 三

《時は昔のそのまた昔……。宇宙はそれはそれは、荒れていた。みな一人ひとり宇宙を我がものにしようとして、その星1つ1つが宇宙を征服しようとして、この世界……。つまり、あんなにも大きい宇宙がどこもかしこも戦争一色だった。

その中でも、まあ『地球』は遅れていた……。たしか恐竜なんていう、バカな生き物くらいしかいなかったからね。

それでも地球以外の特に太陽系の惑星は、戦争の中心にいた……。でも宇宙を、世界を明るく照らしている巨大な星、『太陽』だけは違った。

征服や戦争事態に興味がないらしく……。というか嫌いらしく、誰にも狙われず、誰とも戦わず、ただ……。ただただ宇宙を照らしていた。

でも、その戦争は何年も何十年も続いて、しかも留まることを知らなかった。

だから太陽は

怒った。

そりゃ、あの太陽が怒ったんだ。ほかの星たちはびっくりしたよ……。特に太陽系の惑星たちはね。彼らは太陽のおかげであの定位置にいるわけだし？

怒った太陽はその熱で、宇宙をすべて、焼き殺してしまおうと考えた。すべてを焼き尽くし、すべてをリセットしてしまおう、そう思ったんだ。

すると、ある星から、強い強い何かが伝わってきたんだ。力とかそんなものがつたものじゃなくて、ふわふわとやわらかい、『思い』が伝わってきた。

それは地球に住む、とある生き物だった。たった一匹の小さな兔ウサギだったんだ。

あまりの『思い』の大きさに驚いた太陽は、その兔に対して問いかけた。

地球にすむ小さな命よ……お前のその『思い』の大きさ……お前はいつたい何を思っている？

すると兔は、

「僕はただ、僕の家族を思っています。」
と、答えた。そこで太陽はまたまた兔に問いかける。

だがお前の住む星やそれを囲んでいる宇宙は汚れている。私はこの宇宙を一回消さなければならぬ

「それって……僕の家族も消えちゃうんですか？」

あぁ。もはや、この宇宙は1つにはなれんからな

「でも僕、家族を失うのはイヤです」
と、さらに兔は答えた。

そのとき、太陽は少しだけ兔がかわいそうに思えてきて、こう言った。

かけられるか？

ではお前は、その家族とやらのために、命を

すると兎は、

「命など、それくらいかけられます」と答えた。

『思い』が一層強くなる。それを感じた太陽は言った。

でわ、私とお前。共に宇宙を変えないか？

「…それって、家族を守れる？」

お前しだいだな…

そこで兎は太陽に協力すると言った。

兎の魂は地球を離れ、太陽に向かった。そして太陽は、自らの力の8割ほどを、兎に授けた……。

兎は宇宙でも普通に動ける体…もちろん地球にいたところと同じ『兎』の体を手に入れた。

でもその体は橙色ダイタイイロをしていて、体全体に『太陽の炎ヒカリ』をまとっていた。そして兎は宇宙を変えるべく立ち上がった……

が、そこで予想外の出来事が起きてしまった。それは、力がありすぎて理性を失った……つまり、太陽の8割ともいう膨大な力が暴走してしまった。

暴走した兎は、その暖かい炎ヒカリを持っていながら目に映る星をすべて焼き尽くした。

太陽事態もその兎を止める力はなく、ついに兎はすべてを焼き尽くす炎ヤミを持ってしまった。

宇宙中が終わりだと思った。

しかし、時が経つにつれ、兎の力は弱くなっていった。最後は、力を戻した太陽が、兎の存在を消した。

と思われていたのが1年前。そのころはあー…めでたしめでたしって、思ってたんだけど、実は太陽はまだ力を回復しきれていないらしい。

いや、そこも結構な事件だけど、それよりも、もーっと大変なことがわかってしまった。

そう、実は太陽は兎の力を兎の心のずっと奥に封印し、記憶を消し、なんと…地球に返したってことがわかってきて、まあ……その兎自身は、死んじゃったんだけど……その子孫が生きているという情報がてにはいったんだ。

しかも、力は封印されているけど、持ってはいるらしい

》

えっ！…！！…！！…？

ずっと、つつこむのを我慢していた僕はここでついに……つつこんだ。

今も生きてるって……じゃあ、この地球に、宇宙をもひっくり返すほどの力を持った兎がいるの！…？

《ああ。そうなるね》

た、たたた、大変じゃん！

《そりゃあ大変だけど、問題はそこじゃないよ

》

プルーサはまるで遠くを見つめるように僕らを包む闇を見た。

《あくまでその太陽の力は封印されている。よっぽどのことが無い限りは大丈夫だよ。一番の問題は……》

い、一番の問題は？

《地球以外の星たちがその兎の子孫もろとも地球をぶっ壊そうとしていること。》

ぶ……ブッコワス？

《そう……まあ他の星たちは封印されていても、自分たちを滅ぼせるような力だ……。早めに処理して置きたいんだろ？》

処理って……地球にはたくさん命があるんだよ？ そんな酷いと……

《でも、それが現実だよ。実際僕も早めにやっちゃった方がいいと思う》

そ、そんなあ、プルーサまで……。じゃ、じゃあ、いったいプルーサは僕に何をお願いに来たんだよ！？ そもそも、僕はただの一般人なんだけど？

《まあそう怒るなって。話には順序というものがある》

そう言って、ついつい取り乱してしまった僕をなだめる。

《じゃあまず、地球をぶっ壊した後のことを考えよう。もし、地球をぶっ壊したら兎の子孫は消えるよね？》

う……うん。

《するとどうなる？太陽は力が回復していない……よって、宇宙で一番の力を持っているのは兎の子孫。そして兎の子孫は死んだ……。じゃあ、宇宙全体は？》

うーん。宇宙一の兎の子孫が死んだら……。え？もしかして……！

《そう、そのもしかして》

宇宙は恐れるものが無くなった……つまり

ダイス？

《アホ！ 違っただろ！？》

ひゃ！ 怒られた……

パラ

《恐れるものがない。つまりその先にあるのは

戦争》

えー!? また戦争になっちゃうの!? てか、それってやばいじやん!

《やつと、ことの重大さに気づいたかバカ!》

プルーサは腰に手を当てて頬を膨らました。

わわわわわ! 戦争なんて! ってそれ以前に地球が危ない!!

《で、ここでお前へのお願いが出てくるんだ》

ドキドキ。なんだろう?

《いいか? これから多分何らかの方法で地球が滅びる危機が来る。

そこで……お前がそのいわゆる、攻撃から地球を救うんだ!》

……あのー。話が読めないんだけど。だから、僕はただの高校生

なんだけ あ。も、もも、もしかして?

《やーつとわかつたみたいだな》

そんな まさか

あの空から落ちてきた女の子……たしか名前は『ウサギ』。じ

やああの子が……

兎の子孫 ?

《あー……! 惜しい。その推理、めっちゃ惜しい!》

プルーサは頭を両手で押さえながら、左右にぶるんぶるん振って

いる……

あれ? 結構いい線言っただと思っただけど……あ、でもそうか。

兎の子孫ってことは姿形は『兎』か。

《うおー……! 惜しい!》

またもやプルーサは頭を両手で押さえながら、左右にぶるんぶる

ん振っている。

《じゃあ、言うよ。兎は子孫を残すとき、よくわからないけれど人

間との間に子どもを作った。そしてその子供は人間との間に子供を

作り、またさらにその子は人間との間に子を作った。つーまーり。

その兎の子孫は姿形は人間なんだよ。 あ、そうそう、この情報は

僕が独自に調べたやつだから、他の星のやつらとかは知らないよ！
《姿形が人間？　じゃあやつぱり、あの『ウサギ』は兎の子孫じゃないか！》

《それは違うよ。あの女型の生物は他の星の奴らが送り込んだもの。つまり、あれこそが地球を滅ぼす危機》

そんな

。あの子が地球を壊そうとしている人だったの？

《そう。そして兎の子孫。地球のヒーローは……………お前だ。草山
兔太》

え？　ぼぼぼぼぼぼぼぼぼ、僕ですか？

《そうだ。だから僕はお前にお願しているんだ。僕としても、戦争は嫌いだからね……………避けたいんだ》

ででで、でも！　僕、炎出たこと無い！

《ぶっ。だーかーら、封印されてるから、力は今のところないよ》

じゃあ、地球なんて守るも何もないじゃん！

《そうだそうだ。そんな地球をぶ、ぶっ壊そうとしている奴らと戦うなんて……………僕にその…力があつたとしても、使えないんじゃない。》

《あー。そこは大丈夫。封印のときは太陽に聞いてきたから》
え。

《だから大丈夫ーブイ！》

だ、だいじよばない！！

《なんで？》

《だって……………その、祖先さん？　は、力のせいで暴走しっちゃったんでしょ？　じゃあもし僕のパワー（まだ信じられていません）の封印といっちゃったら、僕はどうなるの？》

《おー。バカのわりには考えてるね。でもそれも大丈夫ーブイ！　力の制御は僕がするし、そのやり方も太陽に聞いてきたから》
え。

《あ！　もう、時間がない。悪いけどもう僕は夢の中にいれないや》
プルーサは時計もついていないのに腕を見た。

《じゃ、そのうち僕も地球に行くから、そのとき詳しく！ じゃね
！》

瞬間。ぴゅん！ という音と同時にプルーサは姿を消した。

そして、僕もだんだん。

意識が遠くなっていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6335y/>

みなさん、ウサギが攻めて来ました！

2011年12月11日01時54分発行